

第24回 医療科学懇話会 抄録

テーマ 脳 卒 中

司 会 生田 宗博

昭和62年9月22日(火) 16時~18時

場 所 金沢大学医療技術短期大学部会議室

カテコールアミン系代謝酵素

1つについて

衛生技術学科 谷島 清郎

脳機能の基本となる情報伝達を担う神経伝達物質には、古典的なアセチルコリンなどのほか、ペプチド、アミン、アデノシン、アミノ酵素等種々の物が知られている。これらのうち、カテコールアミン系伝達物質の代謝について、ノルアドレナリン生成酵素(ドーパミンB-水酸化酵素)に関して、改良した活性測定法を用いて各種日常生活活動と血中レベルの変化を比較し、活動強度とよく平行して変動する事を報告した。脳卒中において、脳血流変化とともに変動する伝達物質は、発症後の症状とも関係し、一方、その前駆体、類縁体、拮抗物質の治療への応用も近年盛んになっている。その意味から伝達物質の代謝、その作用機構などを全体的にとらえることの意義を、脳卒中の予防や治療の面を含めて考察した。

脳卒中における

高次脳機能障害について

作業療法学科 松田 勇

失語症に代表される高次脳機能障害は19世紀末より学問的体系が始まった。神経心理学(Neuropsychology)という言葉は、今から30年前頃より使われはじめ“高次の精神活動を脳の構造と機能の関連において研究する科学”(Hecaen 1972)として学際的に発展してきた。脳を構造から見た場合、左右の大脳半球に分かれ、それらは脳梁によって連結されている。人においては脳の各部はある特定の機能と関連しており、機能偏

在(Functional Lateralization)と称される。例えば、失語症は左大脳半球損傷との関連が強いとされる。リハビリテーション医療の場でも脳卒中等により併発する失語症・失行症・失認症そして痴呆等の評価・治療は大きな課題となっている。

脳卒中退院患者のADLの推移

看護学科 泉 キヨ子

脳卒中患者における看護のなかで、患者の日常生活行動の拡大に対する援助がその大半を占めている。それは、ADLの訓練を中心におこなわれるが、必ずしも訓練室で訓練されているADLが、実際の生活のなかで生かしているとは限らない。それゆえ看護婦は、訓練しているADLが実際の日常生活のなかで生かして使えるような大きな責務を担っている。今回、脳卒中患者7名の退院時とその後の日常生活状況を訪問看護を通して分析し、日常生活行動の回復過程に関する要因を考える資料とした。その結果、ADLの基本的な5項目では退院時最も低値なのは、入浴を含む清潔動作であった。訪問時のADL得点との関係では排泄行動が退院時より低下していた。関連文献を参考にしながら、今後の方向性を報告し、懇談した。